

健康プロデュース学部について思うこと

杉山千歳

健康栄養学科長

私が浜松都田の地に赴任してから13年が経とうとしている。本雑誌の巻頭言を執筆することになるうちは思ってもみななかったが、そのようなことになってしまったので、昔話を含めて本学部について思うことを綴ってみたい。

故きを温め…

巻頭言を執筆するにあたり、何か話のタネになるものがないかと思い、机の中をゴソゴソと探してみたところ、いくつかの物が掘り出された。

掘り出し物1

2005年1月23日の全私学新聞に「浜松大学に健康プロデュース学部誕生」という記事が掲載されていた。冒頭に次のように記述されていた。

『健康に対する個々のニーズや価値観は多様化・複雑化し、これまでの健康に対する考え方では対応しきれなくなっている。この現状を踏まえ、「健康」をキーワードに「栄養」「子育て」「スポーツと心」の三つの切り口から。健康についての的確なサポートができる人材を育成する。健康を総合的に考え、新しい健康のあり方を提言、プロデュースできる専門家を育てることを目的とする。』

開設以降、この目的に向かって進んでこれたのではないかと思う。ちなみに、この記事の中には、鍼灸師、柔道整復師というワードも出現していた、後々の2学科新設を予言するかのように。さらにその後の大学統合を含め、健康プロデュース学部は着々と進化してきた。今後も、健康をプロデュースする学部として進化し続けなければならないと改めて実感した。

掘り出し物2

健康プロデュース学部の1期生を募集するためのパンフレットを発見した。パンフレット冒頭に次のような記述があった。

『「健康プロデューサー」…そんな仕事名、聞いたことがない？それもそのはず、今回、浜松大学が健康プロデュース学部を新設するにあたって、将来目指そうとする仕事の名前を総称したものだからです。』

残念ながら、現在までに「健康プロデューサー」を肩書きにしている学生はいない(?)と思う。しかし、実際には、異なる学科の卒業生が同じ職場で、それぞれが学んできたことを活かしながら、健康をプロデュー

スすることに貢献しているパターンがあるのではないかと推測する。このようなパターンをもっと多く作り出すために、我々教員は、それぞれの分野における「健康プロデューサー」を世に送り出し、さらに彼らの活躍を後押ししていかなければならないと、決意を新たにした。

2017年10月某日、某検索エンジンに「健康&プロ」と入力して検索してみた。健康プロデュース学部のホームページが4番目に位置していた。健康のプロになりたい高校生が検索した時に、「おっ！こんな学部が！！」ということになるのではないかと期待する。

掘り出し物3

掘り出された物の中に、「健康プロデュース学部就任予定者事前教授会」なるものが開催（開催日は2005年1月30日）された時の資料があった。資料の1つに各学科の専任教員を紹介する冊子があった。自分のところを見てみると、『…浜松大学の豊富な自然を利用して何かできないものかと思案しつつ、4月からの浜松での生活を楽しみにしています。』と書いてあった。あのころとほとんど変わらない自然を今も保持し続けている都田地区は、さすが！市街化調整区域である。本年度はちょっとしたきっかけがあり、この自然に挑んでみたいと思っている。試みが何らかのかたちになった折には本雑誌に投稿したいと思っている。

塵も積もれば…

またまた引っ張り出してみた。2007年3月に「健康プロデュース雑誌」が誕生して以降、統合を機に2014年3月には改名して「常葉大学健康プロデュース学部雑誌」となり、20015年3月の健康プロデュース学部10周年記念号で装いを新たとし、昨年度までに計11冊が発行されている。積み重ねて高さを測ってみたところ、8.3 cmであった。これは広辞苑（第六版）とほぼ同じ厚さであった（と言っても最近は広辞苑も電子辞書で扱う場合がほとんどで、実感がわからないかもしれないが…）。背表紙側から眺めてみると、年々一冊の厚さが増している。健康プロデュース学部が誕生して以来の進化の証を見た気がした。今後もこの厚さが増していくことを期待するし、その一部を担うことができればと思いながらこの文章を書いている。

類は友を…

健康プロデュース学部には「健康」に興味をもった人たちが集っている。一人で考えるよりも、それ以上の人が集まって考えたほうが、より良いアイデアが出ることは必然である。それ故、研究においては、学科間で連携して健康を前へ（pro）導く（duce）ための成果を生み出すことが出来るだろう。そして、教育においては、健康を前へ（pro）導く（duce）人（er）を輩出し続けることができるだろう。

WHO憲章に述べられている「健康」の定義は今も変わらない。しかし、健康を取り巻く環境や状況は刻々と変化する。5つの歯車が連携して回ることで、「健康」に関する知識を蓄え（知徳兼備）、刻々と変化する「健康」をめぐる諸事に対峙しながら未来を見定め（未来志向）、歯車の連携による成果をまずは地域に還元する（地域貢献）ことが、健康プロデュース学部存続の意義ではないかと思う。そして、「常葉大学健康プロデュース学部雑誌」は進化の証として高さを増していくであろう。

何年後になるのかわからないが、進化の一時期に健康プロデュース学部の一員として携わることたできたことを誇りに思っている自分があることを想像すると、楽しみに思えてきた。